

創価教育の80年

—その言葉の誕生と学校設立の構想—

塩原将行

1. 創価教育の80年の時代区分

本日は、思い出がいっぱい詰まった創価学園で、体系発刊80周年の意義ある年に学園の教職員の皆様にお話しさせていただく機会をいただき、心より感謝申し上げます。関西学園の皆さん、札幌幼稚園の皆さん、宜しく願いいたします。

私も創価教育の場に携わってきた一人として、「創価教育とは何か」という問いかけを常に持ち続けてきました。かつて海外の方から、「創価教育とは何ですか」と聞かれた時、ウイットを込めて「さわやかな高原の風のようなもの」と答えたことがあります。間違いなく存在するのですが、中々うまく説明ができないということです。皆さんの中には、「牧口先生が80年前に『創価教育学体系』を著しているのだから、それを読めばわかるではないか」と言われる方もおられると思います。しかし、常に学び続ける人・牧口先生は、体系出版から獄死されるまでの14年間でさらに深くなっていきます。そして、戸田先生を経て、池田先生によってより深く、大きく開花してきたのが創価教育です。

80年前の1930（昭和5）年は、「創価教育」という言葉が生まれた年であり、同年11月18日に出版された『創価教育学体系・第1巻』は、半世紀をかけて牧口先生の中で育まれてきたものを「創価教育学」として広く普及しようとした、最初の一書であります。

この体系出版に始まる創価教育の80年を、誰が「創価教育」の理想実現にあたってきたかで時代区分をしてみますと、興味深いことがわかります。「時代区分（1）」のように、体系出版の1930年から、戸田先生が1945年に出獄されるまでの15年間は、牧口先生が中心でした。戸田先生が出獄し、池田先生が1960年に会長に就任されるまでの15年間は、戸田先生が中心と言えます。1960年以降は、まさに池田先生が創価教育の理想実現に陣頭指揮を執られた50年間でした。

しかし、もう一步踏み込んで、弟子として、誰が渾身の力をもって創価教育の理想実現に尽力したかという点、「時代区分（2）」のように、1930年の体系出版から1950年の日大食堂で創価大学の構想を池田先生に託されるまでの20年間は、戸田先生でした。それからは、池田先生の戦いの60年です。戸田先生は、その後、民衆の救済と創価学会の発展に専念され生涯を終えられます。

Masayuki Shiohara（創価教育研究所事務長）

*本稿は、創価学園教職員研修会（2010年8月24日）での講演記録である。

60年前の1950（昭和25）年11月16日、日本大学の食堂で、池田先生の心の中に創価教育の理想実現の魂が継承されました。その時以来の思索と行動があつて、10年後の1960（昭和35）年4月5日、池田先生は、会長就任前のご多忙の中、奥様と共に小平の学園予定地に立たれました。この日から学校設立の構想が現実のものとして動き始めるのです。

<創価教育の80年 時代区分（1）>

1930—1945	体系出版～牧口先生獄死／戸田先生出獄	牧口先生の時代15年
1945—1960	戸田先生出獄～戸田先生逝去／池田会長就任	戸田先生の時代15年
1960—2010	池田会長就任・学園用地視察～現在	池田先生の時代50年

<創価教育の80年 時代区分（2）>

1930—1950	体系出版～創価教育構想を池田先生に託す	戸田先生の時代20年
1950—2010	創価教育の構想を池田先生に託す～現在	池田先生の時代60年

2. 「創価教育」に込められた庶民の幸福への願い

今日は、1930（昭和5）年の体系出版までに牧口先生の心の中で「創価教育」という言葉に凝縮されてきたものは何か、そして、牧口先生の思索の中で育まれた一貫教育の学校の構想を戸田先生はどのように実現されようとしたのかについて、考えてみたいと思います。牧口先生と池田先生はお会いされていませんが、お二人の考えは、深く一致しているように思います。今日お集まりの皆さんが、創立者池田先生の教育思想、ご著作を読み進めていかれる際の、小さな道標みちしるべになればと思い、大変に不十分とは思いますが、お話を進めさせていただきます。

「創価教育とは何ですか」との問いに対して、よく言われるのは、「すべての子どもたちの幸福のための教育」という答えです。紀伊國屋書店評伝シリーズ「学問と情熱」の一卷として、4年前に制作したビデオでは、タイトルの一部に「こどもたちのしあわせのために」と使わせていただきました。

しかし、「子どもたちの幸福のための教育」というだけならば、敢えて、「価値創造の教育」、略して、「創価教育」とする必要はありません。「幸福教育」でもいいです。実はここに、牧口先生と戸田先生の深いお考えがあると思うのです。「価値を創造することができる人間」を育てる教育、それは、今の言葉でいえば、「自分で考えることができる人間」です。創価大学の第3回入学式で、池田先生は、「創造的人間たれ」と、今後創価大学で行うべき教育の根本を示されました。「創造的人間」とは、まさに、価値創造できる人間ということで、牧口先生の「創価教育」と相通じるものがあります。

それでは、すべての子どもたちを価値創造ができる人間に育てるためには、どのような教育が費用対効果も含め価値的なのか、牧口先生は、自身の授業実践の経験と日々の研究の蓄積のうえで『創価教育学体系』を出版されました。牧口先生は、ペスタロッチと重ね合わせて、現場の校

長として、体系を出版することに、強いこだわりを持っていました。体系は、研究室から生まれた学者の理想論ではないのです。

もうひとつ、「創価教育」と命名して、検閲をしている内務省の役人も気がつかなかったことがあります。「考えることのできる人間をつくる」、それも、聡明な、判断力のあるたくさんの庶民を育てるということは、軍国主義に傾斜しつつある当時の政府にとって、どのような意味をもつと思いますか。日本の学校教育は、日露戦争の勝利を境にして、初等教育から順に、ジワジワと軍国主義の色を濃くしていきました。自由を謳歌しているように見えた大正時代も、教育の軍国主義化は、着実に進んでいきました。そこで、政府が目指したものは、従順に兵役に付き、天皇のために「バンザイ！」と叫んで、喜んで死んでいく臣民と、その家族をつくることでした。一人一人の平凡な庶民が、「この戦争は意味があるのだろうか」というような判断力を持つようになったら、もっとも困るのは、実は政府であり、軍部です。

また、「子どもたちの幸福のための教育」を教師たちが真剣に行ったとしたら、戦場に教え子を送ることができるでしょうか。「牧口常三郎は、戦争に反対しなかった」というあらぬ批判をする人もおりますが、如何に見当違いであるか、このことからだけでも、おわかりいただけるものと思います。

さらに、「すべての子どもたちの幸福のための教育」という言い方も、「すべての子どもたちが自らの力で幸福を獲得することができるようにする教育」(下線筆者)と言った方が、牧口先生の心をより正確に伝えるのではないかと思います。

3. 牧口先生はなぜ教育者の道を選んだのか

それでは、このような牧口先生の考えは、そのご生涯の中でどのようにして形成されてきたものでしょうか。

牧口先生が創価教育学を生み出すためには、当然、教育の道を志さなくてははいけません。なぜ、新潟県柏崎市荒浜で生まれた牧口先生が、新潟から北海道に渡り、そこで師範学校進学の道を選んだのでしょうか。鉄道が敷かれる前の日本は、北前船、^{べんざいせん}弁財船と呼ばれる小型帆船が物資輸送の中心でした。明治の初め頃の、新潟をはじめ日本海沿岸は、人口も多く、荒浜は、ニシン漁の網を作る主要な産地でした。そこから多くの網が北海道の漁場に運ばれ、交易と網の修理などのため、荒浜からも、北海道の江差、小樽などに、^{てんて}伝手を頼って移り住んでいきました。

牧口先生が生まれたのは1871(明治4)年です。創価大学創立のちょうど100年前になります。荒浜は、この頃から3つの大きな試練にさらされることになります。第一に、北海道のそれまでのニシン漁の漁場が、乱獲で取れなくなり、北の方へと移動していきます。第二に、これは、荒浜にとって致命的なことですが、今まで荒浜で生産していた麻の網から機械製綿の網に変わっていきます。第三に、船も、和船から大型の汽船へと変わっていき、和船の船乗りは仕事を失い、往時の繁栄を失っていきます。

船乗りであったという牧口先生の父・渡辺長松は、その時代の変化の中で、北海道に出かけている間に音信不通となり、母・イネも、再婚して、渡辺家からいなくなります。牧口先生は、し

ばらくの間は、祖父母と生活をし、近所で貰い乳をしながら育てられますが、その後、父の妹トリの嫁ぎ先、牧口善太夫の養子になり、牧口姓に変わります。

牧口先生が、後の荒浜小学校の前身となる4年制の elementary school に学んだことは、記録には残っていませんが、『人生地理学』に「鴻恩（深い恩）に感謝して」と書いて荒浜小学校に寄贈していますからまちがいないでしょう。かつて荒浜小学校があったコミュニティーセンターの裏に、ひっそりと「牧口久作の碑⁽¹⁾」がたっています。その碑文の文章は、牧口先生が書いています。久作は、荒浜小学校の子どもたちの教育に自分を捨てて尽くして、若くして亡くなった人物です。久作は、牧口先生を教えてはいないと思いますが、荒浜には、久作と同じく牧口先生に深い「印象」を与えた教師がいたのではないかと推測しております。

13歳の時、牧口先生は、小樽に住む親類を頼って北海道に渡りました。荒浜を含む米山山麓周辺のかぞえ12歳の男子は一人前の男となるために米山に登る風習がありました⁽²⁾。なぜ13歳だったのか、そこには自立する年に達したという意味もあるように思います。なお、養父母と一緒に渡ったとする資料もあります。

後に、牧口先生は創価大学の構想を語りますが、その中で、一貫教育の学校の構想とともに、奨学金制度の充実した学校をつくりたいと述べています。その話を聞いた牧口先生の三男、洋三さんの奥さんである貞子さんによれば、「牧口先生ご自身が経済的な理由で十分に学ぶことができなかった。その時のようなつらい経験を、これからの人たちにはさせたくないとの強い思いがあったように思います」とのことでした。

まさに、その経験をされたのが、13歳から18歳の小樽時代の牧口先生でした。この間、小樽警察署の給仕をし、勉強給仕と呼ばれた話⁽³⁾も残っていますが、夜間の高等小学校がまだ整っていない時代ですので、独学で教科書を読むか、もしくは、日本では、1886（明治19）年、牧口先生15歳の時から始まった通信講義録などを利用して学んだものと思います。

牧口先生が自立していくための一番の近道としては、既に何人も荒浜出身者が成功していた商売の道がありました。もちろん師範学校に入学すればお金はかからないということはあったと思いますが、尊敬できる教師との出会いが心に残り教育者の道を選んだものと思います。

余談になるかも知れませんが、音信不通となった父長松とは、北海道で再会したようです。その時、父は、「お前を同志社大学に入れたかったんだ」と言ったというのです。牧口先生が、大学というものを最初に身近に感じたのは、父のこの一言であったかもしれません。牧口家の過去帳には長松の命日が書かれています⁽⁴⁾。牧口先生は、この父を恨んでいなかったことがわかります。家族にも「父長松の墓を建てたい」と話していたようです。

(1) 詳しくは、若井絹夫『牧口久作の碑』についての考察『創価教育研究』第5号（創価教育センター 2006年）、72-84頁参照。

(2) 『第36回特別展 米山信仰 山とひとの民俗宇宙』（柏崎市立博物館 1998年）、66頁。

(3) 初出は、南榎庵主人「地理学に篤学の諸名士伝」『地理学研究』第2巻第8号（地理学研究会 1925年）、29頁。

(4) 過去帳に記載されている明治22年1月10日と同時期に亡くなった渡辺長松という人物が、北海道鳴牧郡歌嶋村に存在していたことが信本俊一氏によって確認された。

4. 「創価教育」の萌芽

1889（明治22）年、牧口先生は、18歳の時に、北海道尋常師範学校に入学します。学費免除で英才を集めた全寮制の小さな学校です。草創期の栄光寮の6人部屋を想像してください。尋常師範学校では、軍隊式教育が行われ、運動会というランドセルを背負って野山を行軍するということもありました。牧口先生は、母校の後輩をいつまでも大事にしていますが、この師範学校に何かを贈ったなどの記録は見つかりません。しかし、上京後も牧口先生を温かく見守ってくれた横山栄次、浜幸次郎、岡本常次郎といった何人かの教師に出会ったことは、牧口先生にとって大きな財産になったと思います。

牧口先生は、1892（明治25）年、21歳の時に教生として附属小学校の教壇に立ちました。後に、その時に考案した作文指導法が、創価教育学の出発点になったと述べています⁽⁵⁾。ご存知の方も多いと思いますが、どういう指導法かという、最初に、牧口先生が新川という学校の近くを流れる川について文章を示します。次に、子どもたちと一緒に、少し大きな創成川について文章を作ります。そして今度は、それぞれが、豊平川についての文章を書き、更には、身近な山についてというように、課題を広げていくというものです。北海道という開拓地の子どもたちは、東京と比べて学力が高いとはいえないでしょう。その中で、どの子どもも皆喜んで、作文を書けるようにするにはどうしたらよいか、そこに、創価教育学の出発点があったというのです。

牧口先生は、同期の中でも成績が良かったため、師範学校の附属小学校の訓導（教員）になります。この時、牧口先生が、先輩の岡本常次郎と研究していたのが単級教室の授業でした。学年の違う生徒を同じ教室でどのように教えるか、多くのへき地を抱える北海道にとっては重要な問題です。牧口先生の教師としての第一歩は、恵まれた中での教育ではありませんでした。むしろ大きなハンデを抱える中で、それを逆手に取って子どもたちに学ぶ喜びを与えるものであったと思います。

牧口先生は小学校の教師をしながら、文部省の検定試験を受けて中学校・女学校・師範学校で地理科の授業を行う資格を得ます。更には、教育科の資格も得ます。そして、母校の師範学校でも教鞭を取り始めます。20代の牧口先生が行う地理の授業は、生徒にとってとても魅力あるものでした。それまで暗記物のつまらないものと思われていた地理学の授業を、生徒たちは、今日はどんな話を牧口先生はしてくれるのだろうと期待しながら開始を待ったというのです。20代のこの時の、授業のために用意した教案が、後の『人生地理学』になります⁽⁶⁾。正確に言えば、原稿量があまりにも多いため、やむなく半分削っています。

牧口先生が一貫教育の学校を構想する最初の原型、それは、20代に教えた北海道の師範学校とその附属小学校にあったのではないかと思います。

⁽⁵⁾ 牧口常三郎「四十五年前教生時代の追懐」『牧口常三郎全集 第七巻』（第三文明社 1982年）、409頁以下参照。

⁽⁶⁾ 同上、409頁。

5. 『人生地理学』と牧口先生の思想

北海道において、牧口先生は、附属小学校の主事（校長代理）を務めるとともに、師範学校の教諭、更には、北海道教育会の三人の理事の一人、また、『北海道教育雑誌』の編集の責任も担います。牧口先生は、名実ともに北海道教育界の中心になりつつありました。しかし、舎監の一人として学生の起こした事件の責任を取る形で、1901（明治34）年5月、本来北海道で勤務しなければならない期限前に、辞表を提出し、受理され、家族共々上京します。目的は、書きためた地理学の原稿の出版です。生徒が編集した『同窓会雑誌』では、「牧口先生の留学」と表現しています。そこには、牧口先生がさらに大きく飛躍されることを期待する教職員・生徒の心情が表れています。

家族を抱えて、背水の陣で上京した牧口先生でしたが、東京で無名の牧口先生の、それも千ページを超える本の出版は困難を極めました。出版社でアルバイトをしながら、母と妻、子供3人と6人で三畳の部屋で耐え抜き、図書館に通い、友人に本を借り、更に原稿に加筆しながら、ついに1903（明治36）年10月に『人生地理学』出版にこぎつけます。

この不可能とも思われた出版を可能にしたのは、牧口先生の人格の力でした。それが、ぜひとも牧口先生の出版を応援したいという支援者を産み、その連鎖と連帯が、不可能を可能にしているのです。

『人生地理学』は、地理教員やそれを目指す人の格好の地理学書でもありました。「地理学の頭を鍛えるのにこの本を読んだ」という声もありました。極めて幅広い知識を持っている人を、「博覧強記の人」といいますが、牧口先生は、まさにそれで、万葉集をはじめとする日本の古典、漢籍、経済学、社会学を始め、幅広い膨大な資料を基に『人生地理学』を執筆しています。驚くばかりです。

更には、英語の原書も読んでいたことが分かりました。昔から日本の学者は、その論文をどれだけ外国の文献を読んでいるかで評価するところがあります。その為か、牧口先生は原書を読んでいないと批判している書評がいくつかありました。そのひとつに、「原書を二つ三つしか読んでない」と書いているものがありました⁽⁷⁾。「何、二つ三つも原書を読んでいる」、これは大事なことだ。私は、『人生地理学』の引用文献を全部あたりました。そうしましたら、確かに英語で読んだ本が三冊見つかりました。

牧口先生は、独房も三畳間でしたが、晩年を過ごされたご自宅の書齋も三畳ほどのささやかなお部屋でした。そこに英語の本が残っていました。その一冊は、『アングル・トムズ・ケビン』です。いつ頃購入し読んだものか定かではありませんが、晩年までお手元に置かれていたということは、思い出のある一冊であったのかも知れません。

『人生地理学』の中には、牧口先生の生涯を通じて一貫しているコア（核）の部分を表現した所があります。それは、「緒論」にある「外国の働く人々への感謝が綴られている部分」と第30章の「人道的競争を論じた部分」です。

⁽⁷⁾ 『慶応義塾学報』第71号（慶応義塾 1903年）、73頁。

最初に、「緒論」の部分を読み下して紹介します。

我が家に一人の赤ん坊が生まれたが、妻の乳が出なかった。そこで、粉ミルクを与えることにした。ここにおいて、わが家族は、ヨーロッパのユラ山麓の牧童に感謝しなければならない。また、その赤ん坊が着ている綿の服を見ていると、真黒なインド人が炎天下の下で流れる汗を拭きながら栽培している綿花を考える。平凡な一人の赤ん坊も、オギャーと声をあげた瞬間から、その命は世界につながっているのだ⁽⁸⁾。

まず、率直に感じるのは、牧口先生も炎天下、汗を流して働いた経験があるなどということです。そうでなければこのような言葉は出てきません。おそらく、それは、師範学校入学前の少年時代でしょう。このように会ったこともない外国の庶民に対する深い感謝から書き始めることは、出来るようで、なかなか出来ることではありません。当時、インドは英国の植民地で、インドの人々は英国の搾取の対象とされていました。私は、このような会ったこともない異国の人への感謝のまなざしこそが、創価の世界市民の要件だと思います。

次に、「人道的競争」の部分です。国家間の生存競争の形式として、「軍事的競争時代」、「政治的競争時代」、「経済的競争時代」と変遷してきたと述べたうえで、人道的競争は現在（19世紀）の国際社会で見ることにはできないが、経済的競争に代わって、次の時代は、人道的競争の時代になることは想像に難くないことである。人道的競争とは、武力や権力で人々を従属させるのではなく、無形の力を持って、その国の人々の、心からの信頼を勝ち得ていくことであると述べています。

トルストイの人道主義という言葉が日本に翻訳されるのは、『人生地理学』出版以降です。世界にわずかに芽生えつつある人道主義の思想を、牧口先生のアンテナは敏感に捉えています。しかし、牧口先生自身の中にも同じような発想がなければ、人道主義を人道的競争として、更により具体的なものとして、展開することはできなかったでしょう。

牧口先生が人道的競争を論じるにあたって下敷きにしたのは、建部遜吾⁽⁹⁾という社会学者が、帝国主義の発展を説明するために使った「軍事的競争」、「経済的競争」、「文化的競争」という考え方です。牧口先生は、この用語と考え方を、「軍事的競争」、「政治的競争」、「経済的競争」、「人道的競争」と置き換えて展開することによって、帝国主義の発展形式を説明するのではなく、今後の国際社会のあるべき姿、人道的社会への期待までを表現しています。

この『人生地理学』は、無名の青年によって書かれた千ページもの書物にも関わらず、多くの人に愛読され、更には、中国からの留学生にも共感を持って熟読されました。そして、出版わずか4年後に、その全訳『最新人生地理学』が、上海で出版されています。

なぜ、「人道的競争」が大事であると牧口先生は考えたのか、それは、身近な人々だけではなく、世界のすべての民衆の幸福も同様に大事であるとの考えがあったからです。牧口先生は、荒浜の

⁽⁸⁾ 『牧口常三郎全集・第1巻』（第三文明社 1983年）、13頁。

⁽⁹⁾ 建部遜吾「国際競争と帝国主義」『日本人』第178号（政教社 1903年）、86-90頁。

地でも、小樽・札幌の地でも、日々の生活を助けあって生きる庶民の中にいました。東京に出てきてからも同じです。牧口先生にとってこの感覚は少しもぶれることなく、獄中で亡くなる瞬間まで続いていくのです。

6. 東京高等師範学校での仕事と留学生に対する教育

牧口先生の『人生地理学』は、増刷が間に合わないほど売れたといえます。それは、当時の新聞・雑誌が競ってきわめて好意的な書評を載せたことも理由のひとつでしょう。『人生地理学』の書評は、全国の図書館が所蔵する当時の雑誌・新聞で、出ている可能性のあるものはほぼ全て見て、42まで確認しました⁽¹⁰⁾。しかし、地理学者の評価は、湯川秀樹の父である小川琢治を除き、ほとんどが冷やかなものでした。牧口先生は、帝大出身ではない。大学を出ていないからです。

牧口先生も、『人生地理学』の成功によって、内心、なんらかの研究の道を期待したかも知れませんが、出版から2週間後、就職したのは、東京高等師範学校（現在の筑波大学）の同窓会である茗溪会の書記（大学の事務職員）でした。この学校の校長は、講道館柔道で有名な嘉納治五郎です。実は、上京した月に牧口先生は、講道館に入門しています。牧口先生は、『人生地理学』の題名を、当初、『社会地理学』と考えていました。しかし、「社会」という言葉が、当時危険思想とみなされていた「社会主義」を連想してしまうというマイナス・イメージを危惧して、『人生地理学』という題名をすすめてくれたのは、東京帝国大学教授の坪井九馬三でした。その彼は、嘉納の古くからの柔道の弟子ですので、彼に勧められて講道館に入門したのではないかと考えています。牧口先生が住んだ三疊の下宿屋も、東大に近い向ヶ丘に住む坪井の家と上野の帝国図書館に近い本郷追分町でした。

しかし、茗溪会の職員に推薦してくれたのは、嘉納ではなく、おそらく高等師範出身の母校北海道師範学校の先輩教員の誰かではないかと思っています。ここで牧口先生は、住居付きで茗溪会の書記の仕事につきます。職員として経理、施設管理、図書の管理、そして、『教育』という権威のある教育雑誌の編集責任者も務めます。日本の教育界の最高学府の心臓部で、多くの著名な教育者、学者とも交友を結びます。

しかし、牧口先生の心の中に晴れぬものがありました。牧口先生は、その心を、『教育界』という雑誌の座談会のなかで語っています。「私も先頃お話し申したように永く教育に従事しておりますもので、こういう境遇になっても教育に対する趣味は離れません」。教育界の頂点に位置する場所で働くことができても、眼の前に子どもたちのいない世界は、牧口先生にとって「不遇」な立場であり、そのような状況になったとしても教育に対する情熱は失っていないというのです。

このような牧口先生の心を知ってでしょうか。同じ嘉納が学院長を務める宏文学院⁽¹¹⁾で、牧口先生は中国からの留学生に地理学を教えることとなります。しばらくして、中国人女性の師範学校教員の育成を始めた東亜女学校でも教えることになりました。宏文学院での牧口先生の教育

⁽¹⁰⁾ 拙稿「牧口常三郎著『人生地理学』41の書評」『創価教育研究』第2号（創価教育研究所 2003年）、261頁以下参照。その後、更に1本の書評を発見した。

⁽¹¹⁾ 宏文学院は、開設時は、弘文学院と表記されたが、宏文学院で統一して表記した。

は、留学生の心の中に深く残るものでした。牧口先生が教える留学生は日本に来たばかりで、創価大学でいえば別科の学生です。日本語が十分わからないので、通訳をつけての授業です。それにもかかわらず、ここで学んだ留学生は、牧口先生の『人生地理学』を中国語訳するだけでなく、牧口先生の講義を翻訳・編集して出版し、それが江蘇省の師範学校の教科書として使われました。日本語も十分でない中国からの留学生が牧口先生の講義を十分に理解できたのは、それなりの理由がありました。要点を押さえて講義内容を書き込めるノートを作り、配布して講義を行っていたのです。それは、後に、『教科日誌』2冊として日本人向けにも出版されることになりました。『教科日誌』は、大阪の柏原市に住む府立高校の図書館司書、秋成史郎さんがその存在に気づき、一緒に調査を進める中で実在が確認できました。しかし、実物は、まだ見つかっていません。

「人道的競争」といっても遠くにあるものではありません。牧口先生は、その実践をこの宏文学院で行っていたのです。牧口先生は、非常勤講師という立場でありながら、日本語も十分に理解できない中国人学生に全力で講義しました。彼等の多くは植民地化していく中国をなんとか自立した豊かな国にしたい、その為には学問しかないという思いで来日しました。一時期は、1万人もの留学生が神田を中心に住んでいました。中華街というと横浜が有名ですが、日本の中華街の発祥は、実は神田神保町界隈です。

牧口先生にとって中国は格別の存在です。宏文学院の教え子の顔が浮かぶからです。しかし、その多くは、祖国の独立を願いながら辛亥革命で倒れていきました。なぜなら、孫文を支えた黄興は宏文学院出身であり、宏文学院は、辛亥革命の有力な震源地となったからです。

牧口先生は、東京高等師範では、高等教育機関を職員の立場で、その内側から見る経験をしました。また、実際に留学生教育も経験しました。

7. 聡明な庶民を育てる女性教育

先ほど紹介した『教育界』の座談会で、牧口先生は、もうひとつ、大事なことを語っています。牧口先生は、学校というものが好きでした。しかし、逆に日本の学校が抱える問題点にも、深く心を痛めていました。それは、学校で学んだことは社会に出て役に立たないということです。社会に不適應な人間を作ってしまうということです。皮肉な言い方ですが、もし、学校で学んで役に立つところがあるとすれば、それは学校である、学校の教師の職であるという意味のことを言っています。さらに、福沢諭吉の「日本の学校は子供の墓場である」との言葉を引用しています。

また、青少年を長い年月、学校という世界に閉じ込めていることは決して良いことではないとも言っています。このような発想が、半日学校制度の提唱にもつながっていくようです。現在の日本を、「高学歴化」ではない「長学歴化」であると皮肉った高等教育の研究者がいましたが、牧口先生のこの主張と、通じるものがあるように思います。

牧口先生のこのような問題意識と教育への情熱は、『人生地理学』出版の2年後、1905（明治38）年5月⁽¹²⁾にひとつの学校の創立として結実します。それは、小説『新・人間革命』「学光の章」

⁽¹²⁾ 牧口先生の庶民女性の教養教育を目指した学校の創立から100年後の2005年5月には、アメリカ創価大学の第1回卒業式が行われている。

でも紹介された女性のための通信教育の学校、「大日本高等女学会」です。当初、この学校は、牧口先生の師範学校の恩師でもある浜幸次郎を中心に、牧口先生が支える形で準備がすすめられてきました。直前になって浜が、東京市の視学、今で言う教育長に任命されたため、学校経営のすべてを牧口先生が主幹として担う形で創立されました。

当時、日本では、従来からあった家事・女芸を教える女学校だけでなく、高等女学校が各県に一校程度創立され、普通教育、いまの中学で教えられている英語や理科、地理といった、家事には直接関係ない、言ってみれば、聡明な女性を育てるための教養教育がはじまっていました。しかし、1905（明治38）年には、全国の高等女学校は、公立私立を合わせても100校程度にすぎません。

牧口先生の目指した女性教育は、高等女学校で教えているのと同じ内容を、最高の講師陣で、希望する子どもたちに安い費用で提供しようとするものでした。牧口先生は、高等師範の職員をしていましたので、女子師範も含め、幅広い人脈がありました。そして、牧口先生の掲げる「聡明な庶民女性を育成する教養教育」に賛同する教員に講義録『高等女学講義』や、並行して発行する女性雑誌『大家庭』に原稿を書いてもらいました。

最近の予備校には、有名講師のわかりやすい講義をいつでも映像で学べるというものがあります。それと同じように、牧口先生は、家事等で忙しい女性でも、自宅で空いた時間を使って、講義録を読んで勉強できる学習方法を考えました。明治に入り、前嶋密によって郵便制度が全国的に整いましたので、当時としては、最先端の方法で、だれでもが学べる教育機関を私立の学校として始めたのです。牧口先生は、一方通行の講義録配布だけでは納得しません。月一回、第3日曜日には、受講生のための講習会と懇談会を大日本高等女学会の校舎で開きます。後にそれは、東京では各区単位で、全国でも可能なところからスタートして、生徒の顔の見える教育を、牧口先生自らも積極的に懇談の輪の中に入って実践します。それがどれほど社会のニーズに合っていたかを示す証拠として、一年後には、生徒数が2万人に達しているのです。

この学校の創立は、日露戦争の最中です。戦争中に牧口先生は庶民の女性教育を考えていたのです。開校の少し前に日本海海戦があり、さらに、203高地の争奪戦、奉天の戦いと、多くの庶民が兵士として戦地に送られていきました。その中で、牧口先生は、戦地に親が行っている子には授業料半額免除、小学校長が推薦する子には授業料一切免除という大胆な奨学制度を設けています。牧口先生は、少年時代、学べない辛さを身にしみ経験しています。大量の学費減免を認めることは、経営者としては、あり得ないことです。しかし、牧口先生の心は、そうしないではおれなかったのだと思います。牧口先生に、学校の経営者としてセンスがなかったとは思いません。授業料の送金先である郵便振替の番号を1111にして分かりやすくするなど、良く工夫していると思います。

学校がスタートして半年、牧口先生は人生の大きな選択を迫られました。それは、小樽時代の幼友達藤山万吉からの申し出を受けるかどうかでした。彼は、藤山家に養子に入り、その後北海道でも指折りの資産家になっていました。彼は、『人生地理学』の出版を、我がこのように喜び、志賀重昂（『人生地理学』の校閲批評を行った）を介して牧口先生に研究支援を申し出ました。そ

れを受け入れれば、牧口先生は、外国に留学することも可能になります。学者への道も大きく開けるかもしれません。しかし、牧口先生は、その申し出を「今どうしてもやらなければならないことがあるので」と丁重にお断りします。この「やらなければならないこと」とは、女性教育、大日本高等女学会のことです。

その後、牧口先生は、下田歌子が創立した大日本少女会の主幹も兼ね、初等教育と中等教育を接続した通信教育の学校を運営するだけでなく、『先世』という教育雑誌の編集・発行も始めます。35歳頃の牧口先生は、エネルギーで、理想に燃えて、あらん限りの情熱を教育事業に傾けます。また、渡米協会の講演会の講師としても度々登壇し、アメリカに留学・移住する人々に、『人生地理学』から見たアメリカを語っています。

日露戦争は辛くも日本の勝利に終わります。しかし、貧乏な日本が借金を重ねて行った戦争でしたので、日本を深刻な不況が襲います。当然、女性の教育、それも嫁入り道具にもならない教養教育は、庶民の家計からは真っ先に切り捨てられました。更に、牧口先生が借金の保証人になったことなどもあり、高等女学会も深刻な経営危機に陥ります。上京した後も蓄えが底をつく大変な経済苦でしたが、今度は借金取りが、家に度々押し掛けてくるようになりました。「常三郎は、なかなか有望な見込みのある青年だ」ということで、嫁いできたクマ夫人でしたが、この頃は、何度も大変な思いをしたようです。

普通であれば、そこで学校を閉じるのですが、牧口先生はそうはしませんでした。篤志家を募り、御主人が元関白であった二条家の婦人、本物の亭主関白の婦人を女学会の会長に据え、今度は、学費一切無料の、女性の自立のために、生活の糧となる仕事を教える学校を、大日本高等女学会に併設します。しかし、ついに牧口先生も力尽きて、高等女学会は人手に渡ることになります。

牧口先生は、大日本高等女学会で学校経営の一切の責任を担いました。それがいかに大変なことか、骨身にしみて経験されました。では、その牧口先生が、なぜ、さらに壮大な創価一貫教育の学校の構想を戸田先生に託したのでしょうか。それはこの後でお話ししたいと思います。

8. 文部省勤務を経て

心身共に疲れ、早稲田の下戸塚の知人宅に身を寄せていた牧口先生でしたが、1909（明治42）年2月、東京市を代表する名門校、富士見小学校⁽¹³⁾の首席訓導になります。東京市視学であった浜幸次郎の配慮でしょうか。しかし、その一年後には、同校を病気のため退職、その3ヵ月後には文部省図書課の地理教科書の編纂等の仕事につきます。この時、文部省には、北海道師範学校の校長であった横山栄次が視学としていました。文部省での仕事は3年弱ですが、全国の小学校で使う地理教科書の編纂を任されたということは、いかに牧口先生が高く評価されていたか分かります。

しかし、本人の意思もあってか、3年後、東京市内の小学校に校長として転任することになり

⁽¹³⁾ 本稿では、尋常小学校とすべきところ、小学校と表記している。

ます。その理由のひとつは、文部省にいても牧口先生が考えるような地理教科書は編纂できないという現実と理想との隔たりに悩んだこと、そして、茗溪会の時もそうでしたが、子どもたちの顔の見える学校で仕事をしたいという強い思いがあったのではないかと思います。

9. 大正小学校における教育

1913（大正2）年、牧口先生は、東盛小学校の校長に就任し、併設の下谷第一夜学校の校長を兼任します。さらに、1916（大正5）年には、大正小学校の初代校長に就任します。私は、『創価教育学体系』の成立を考える時、この大正小学校の時代がきわめて重要であると思います。

なぜならば、第一に、この頃に「地理学者牧口」から「教育学者牧口」への転換点があると思うのです。それは、牧口先生の地理学の著作である『教授の統合中心としての郷土科研究』と『地理教授の方法及内容の研究』が東盛小学校時代までに出版され、それ以降は、新たな地理学の著作を出版していないからです。

第二に、大正小学校の創立の経緯が重要だと思うのです。同校の訓導であった前田偉男は、大正小学校創立にあたり、全国から優秀な教師を募集したと述べています。前田も、「ゲゲの女房」で一躍有名になった鳥取県から参じました。私は、大正小学校は、これからの教育を考えるための東京市の実験小学校だったのではないかと思います。東京の小学校は、地名をその校名につけています。しかし、大正小学校は大正町にはありません。校名の由来として考えられるのは大正という年号だけです。

さらに、妙悟空（戸田城聖）著として聖教新聞に連載された『人間革命』には、牧口先生には生涯大正小学校の校長をしていただく約束があったと書かれています。文部省、東京市の牧口先生を知る人々は、牧口先生の教育に対する深い心を知り、牧口先生の理想の教育を実現する場として、大正小学校を用意したのではないかと思います。大正小学校は、一人ひとりの教師が伸び伸びと教育に打ち込める、教師にとっても、理想的な学校であったようです。

しかし、牧口校長時代の大正小学校の資料は全くと言っていいほど残っていません。教育雑誌『教育界』の記事から考えると、毎月教職員で研究会を持っていたこと、創立記念日には東京市内の多くの教育関係者を招待し、授業参観と研究発表が行われていたことがわかります。牧口先生の書道教育というと蝦名友秋先生が有名ですが、大正小学校の書道教育については、牧口校長自身の講演記録が残っております。私は、この頃からの牧口先生のメモが、『創価教育学体系』へと結実していったのではないかと考えています。

しかし、一父兄が自分の子供を特別扱いしないことに腹をたて、権力者を動かし、牧口先生は、西町小学校に左遷になります。この時、権力者側についた教頭を除き、他の教職員と父兄数百人が、近くの神社に集まり集会を開き、断固牧口先生の転校を阻止しようと立ち上がったことが、当時の新聞に掲載されています。それだけ、牧口校長は父兄からも慕われていました。その後の小学校でも、牧口校長と教職員・父兄の関係は同様でした。

10. 貧しい子供たちへの教育

牧口先生の東京での教歴を考える時、外してはいけないのは、夜学校、特殊小学校での経験です。白金小学校を除く、東盛、大正、西町、三笠、麻布新堀小学校で夜学校の校長を兼務し、特に、三笠、麻布新堀は、貧しい子どもたちが学ぶ授業料のいらない小学校です。出席も悪く、家庭の中にいろんな問題を抱えています。子どもの健康状態もよくありません。

小学校と夜学校と兼務すると、どうしても昼間の学校がメインで、人数も少ない夜学校は付け足しになりますが、牧口先生は、夜学校に可能な限り充実した授業体制を考え、子どもたちの健康管理にも心を配っていたようです。

それを象徴するのが、三笠小学校における学校給食の実施です。三笠小学校には、昼食を持参できない家庭がたくさんありました。そのすべての子どもたちに昼食を提供したいと、篤志家をコツコツ歩いて寄付のお願いをし、設備投資が少なくてすむパンと汁の給食を始めます。それを紹介した新聞記事の中で、牧口先生は悩みを語ります。「本当は夜間の子どもたちにもやってあげたいのだが、わずかな食事を出すことで、家でご飯が出なくなるのが心配だ」というのです。現場を知っていなければ出ない言葉です。この制度を考えるにあたって牧口先生は、シカゴ郊外の学校で実施されているペニー・ランチ⁽¹⁴⁾を参考にしたと言っています。牧口先生のアンテナは驚くばかりの情報収集能力を持っています。

牧口先生と戸田先生との出会いは、1920（大正9）年の1月頃、戸田先生19歳の時です⁽¹⁵⁾。これは、同年6月に三笠小学校に異動する前の西町小学校校長の時代です。この時、戸田先生は、3ヵ月間の臨時代用教員に採用されますが、牧口先生と一緒に仕事をした期間はごくわずかです。牧口先生は、その後、三笠小学校では校長として、1922（大正11）年3月まで2年間勤務しておりますが、その間は、戸田先生も訓導として牧口先生のもとで働きました。牧口先生が白金小学校へ転任した後は、戸田先生は教員を辞めていますので、この三笠小学校の時代は、お二人にとっても、創価教育の成立を考える上でも、重要な時代ではないかと考えています。

11. 白金小学校での校長としての行動

私はこれまで、当時白金小学校に学んだ多くの卒業生の方とお話することができました。小学校の校長先生と生徒の距離ということですが、私は小学校の校長先生の名前は全く覚えていません。まして、話しかけてもらった記憶もありません。しかし、白金小学校の卒業生には、牧口校長を覚えている人がたくさんいました。中には、校長のあいさつがいつも長かったという人も

⁽¹⁴⁾ 文部省編纂『学校給食』（帝国学校衛生会 1929年）、156-159頁に「シンシナチーの一ペニー昼食」を紹介している。要約すると、「シンシナチーに於ては教員、市民連盟及びユダヤ婦人会の共同勢力によつて五校に於て一ペニー昼食が給せられてゐる。（中略）給食事業を開始するに當り、本校では先づ兒童の家庭の状況を調査した。その結果甚だしき貧困家庭は少ないが、母親の多くは賃仕事に朝早くから出掛ける。従つて兒童の多くは十分な朝食を食べずに登校するといふ事実を知つた。（中略）このため我々は一セントで栄養の充分なる食物を兒童に与へることを目的とした」。

⁽¹⁵⁾ 西町小学校の同僚窪田正隆の弟宛書簡による。拙稿「厚田が生んだ偉人 戸田城聖を語る—『創価教育学体系』出版前後を中心に—」『創価教育』第2号（創価教育研究所 2010年）、176頁参照。

いましたが、これは複数の証言があることから事実だったようです。また、ある人は、牧口先生は、校長室にいることは少なく、よく校内を回っていたといいます。体調が悪くて体育の授業を見学していた時に声をかけていただいた。窓ガラスをボールで割って、校長室にしょげて謝りに行った時に、「ボールの弾道がわかって良かったではないか」と励まされ、その後理系の大学教員になった人もおりました。

お会いすることはできませんでしたが、『港区職員退職者会たより』に、家庭的にも大変だった時に、牧口先生の優しさに慰められた思い出を書いている人がいました。この人は、もうひとつ大事なことを書いておられました。牧口先生との四年生から六年生のお別れの式では、多くの子どもたちが泣き出したというのです。牧口校長との思い出を持った子がたくさんいたということでしょうか。

私は、多くのご年輩の方にお会いさせていただき感じたことがあります。それは、小さな心遣い、励ましは、数十年を経過していろんな出来事が記憶から削ぎ落ちていっても、大切な宝物としてしっかりと残るものだということです。

1923（大正12）年5月には、白金小学校校長の牧口先生は、大阪、兵庫、京都の小学校を視察されております。実は、その50年後に、関西女子学園が創立されるのです。

12. 牧口先生の入信と「創価教育」という言葉の誕生

ここで、牧口先生の日蓮仏法への帰依と『創価教育学体系』の関係について述べておきたいとします。牧口先生の入信は、1928（昭和3）年6月頃と言われております。資料を重ね合わせていくと、ハイわかりましたとすぐに深い信仰に入ってしまったというよりも、当然のことですが、信仰が深まっていくいくつかの段階があったように思います。牧口先生は、在家の信者である三谷素啓という目白商業の校長と長時間話していく中で日蓮仏法に深く心が惹かれていきます。三谷は、当時、『立正安国論』を研究し、その解説書の執筆を進めていました。すべての不幸の原因は誤った宗教にある。すべての民衆を幸福にするには正しい宗教によるしかないという日蓮の主張は、牧口先生の心を大きくゆさぶるものでした。牧口家は日蓮宗でしたので、日蓮を全く知らないわけではありませんが、僧侶ではなく、在家信者の三谷から聞く話は新鮮でした。彼は、新聞記者を経て、社会事業の経験もあり、牧口先生と同じく、子どもをなくした経験もありました。しかし、三谷には、牧口先生を入信に踏み切らせたものの、さらに深く納得させるまでには至らなかったようです。牧口先生は、そのあと、1928（昭和3）年7月に四男を結核で亡くし、翌1929（昭和4）年5月には、長男を結核で亡くします。その悲しみの中にあって、日蓮の仏法を思索し、信仰の確信を深めていったようです。

『創価教育学体系・第1巻』には、「法に依って、人に依らざれ」以外、日蓮の著作からの引用はありません。第3巻、第4巻と進むに従い、その引用は増えてきます。牧口先生の初信の功德として、永年の願いであった、自らあためてきた教育学の出版が、戸田先生の助力によって実現したということは間違いのないと思いますが、自らの教育学と日蓮仏法との融合は、1937（昭和12）年の『創価教育法の科学的超宗教的実験証明』まで待たなければならないのではないかと思います。

す。

「創価教育」という言葉の誕生がいつであったか。時習学館の戸田先生のお部屋での師弟の話
 らいはいつであったか。お気づきの方もいると思いますが、二説あります。「昭和5年2月」説と
 「昭和4年2月もしくはそれ以前」説です。戸田先生が、唯一その時期に触れているのは、口述
 筆記で、『聖教新聞』に連載された妙悟空著の「人間革命」で、ここには昭和5年と書いています。
 しかし、有力とする別資料を提示して昭和4年2月もしくはそれ以前という説があります。私は、
 この提示された2つの資料は根拠不十分として昭和5年でよいと考えていますが、大事な問題で
 ですので、決定的な資料を見つけ出さなければならないと考えています。そのように思うようにな
 ったのは、このあとお話しする1929（昭和4）年12月に出版された戸田先生の第一著作『家庭教
 育学総論 中等学校入学試験の話と愛児の優等化』の中に、「創価」という言葉が出てこないから
 です。

13. 戸田城外著『家庭教育学総論 中等学校入学試験の話と愛児の優等化』

ここで、牧口先生を支えて、『創価教育学体系』出版を原稿整理から出版社の手配まで全て進め
 てこられた戸田先生について、触れたいと思います。

戦前の戸田先生は、「実業家」のイメージが定着しています。しかし、本当にそれだけなのかと
 いうことがずっと気になっていました。今日は、時間の関係で結論だけを申し上げますが、戸田
 先生は、1930（昭和5）年以降、『推理式指導算術』をはじめ20冊を超える受験参考書などを著し
 ただけでなく、月刊教育雑誌『環境』、『新教材集録』などを編集・発行してきました。さらに、
 1940（昭和15）年には、日本で二番目となる学年別学習雑誌『小学生日本』を発行し、そこで通
 信教育を行うなど、創価教育の実践と普及に尽力されてこられました。1942（昭和17）年以降、
 出版統制で思うように雑誌などが出版ができなくなった後は、実業家というイメージだけが残り
 ますが、戦後も、出獄直後から、敗戦下で思うように学ぶことができない子どもたちに学習の機
 会を送り続けてこられました。

それらの事実を踏まえたうえで、『家庭教育学総論 中等学校入学試験の話と愛児の優等化』に
 ついて触れてみたいと思います。この本は、小学校5、6年の子どもを持つ親のために書かれた、
 時習学館館長 戸田城外著の家庭教育の啓蒙書です。戸田先生は、牧口先生と初めて会った時、
 「どんな劣等生も優等生にしてみせます」とおっしゃいましたが、その戸田先生が、どうすれば
 そうできるか、詳しく書いておられます。

『推理式指導算術』は、算術の問題を工夫して配列し、面白くてどんだん力がつくようにした
 問題集ですが、愛児の優等化は、戸田先生の教育観の総論にあたる本ではないかと思ひます。そ
 れはまた、牧口先生と戸田先生で議論を重ねてこられた創価教育の教育法を知る上でも一級資料
 だと思います。実は、この本は一冊しか見つかりません。ある私立の図書館にあります。全
 文を紹介する許可をもらい、現在、創価大学創価教育研究所の研究紀要『創価教育』に三回に分
 けて紹介しているところです。20数冊も出版された戸田先生の学習参考書などのうち、まだ8冊
 しか見つかりません。ドラゴン・ボールを探す思いで、カンと足で生涯かけて一冊でも多

く探し出したいと思っております⁽¹⁶⁾。

80年前の1930（昭和5）年頃は、大学進学は庶民にとって遠い存在でした。試験地獄という言葉が、当時生まれています、小学校から中等学校への進学のことを言っています。『創価教育学体系』の「緒言」も、この試験地獄にあえぐ子どもたちに対する牧口先生の思いが綴られています。前年の1929（昭和4）年に書かれたこの本でも、戸田先生は、受験対策の暗記のために、子どもたちの頭の中が知識の物置となっていることを深く憂えています。

本来は、「能量」という、広く知識を吸収し、考え、発信する力を鍛えていくことが大事であるが、試験対策のために詰め込み教育が行われている中では、とてもそんなことが行える状態ではない。それでは、理想の教育はできないのか。戸田先生は、靴の例をあげます。今履いている靴がどうも合わないようだからと、別の靴にいくつも履き替えるのだがどうもピッタリしたものがない。そうしているうちに、これならまあ良いかと思うものがあつたので、その履いている靴を見たら、以前、履いていた靴だったというのです。この例をあげ、現状の入試制度に問題点は当然あるが、いろんな試行錯誤の中で実施されている制度である。むしろ、その現状の中で、どのようにしたら、能量を身につけることができるか、その教育方法を考えていきたいというのです。

今、能量という言葉を、「考える力」と置き換えると埃をかぶっていますが、クリティカル・シンキング、教養教育で培われる力と考えていただくと良いかと思えます。当然、小学生対象ですからその基礎となる力です。それを自然のうちに身につけることができる教育方法を、戸田先生は、「推理式」と命名して出版されました。『推理式指導算術』の背表紙には、「創価教育学原理による」と書かれています。戸田先生は、「創価」教育を「推理式」教育として展開されたものと思えます。

ちなみに、先ほどあげた戸田先生の著した参考書の約半数は、『推理式指導読方』等の国語の参考書です。「数的推理」だけでなく、「文章推理」の学習法についても、創価教育学に基づいた研究と出版をなさっておられます。

次に、劣等生がたくさん生まれてくる構造について、戸田先生はこう述べています。本来よほどの知的障害を持つ場合を除いて劣等生は存在しない。学校で成績が悪い子どもでも、社会に出て、皆それなりにやっているのではないか。むしろ教室の授業が、劣等生を生み出しているのだというのです。どうやって生まれるかという、あることを一時間で理解できる人と、二時間、三時間かかる人がいて、それを同じクラスに入れて二時間でわかるスピードで授業すると、当然、三時間かかる人はわからなくなる。翌年も同様のことが繰り返されれば、その生徒にとって授業は苦痛でしかなくなる。子どもたちが引かかって、前に進めなくなってしまった、その部分を如何に適切に除いてあげるかが大事だというのです。

また、時習学館で預かった劣等生を伸ばした例をいくつか挙げています。中には、時習学館の担当の教師も「とてもこの子はダメだ」と音をあげたこともあつたようです。それに対して、戸田先生は、「もし、その子が良くならないようであるなら、戸田は、時習学館の看板を外す」とま

⁽¹⁶⁾ 2010年12月に9冊目が見つかった。

で宣言したそうです。担当教師も、そこまでおっしゃるならと決意して、見事志望校に合格させるところまで育てたという話も紹介されています。

14. 牧口先生の学校設立の構想と戸田先生

牧口先生の考え方を誰よりも深く理解していたのが戸田先生です。その師匠の構想は、わが身を捨てても実現するというのが戸田先生です。80年前の『創価教育学体系・第1巻』の出版はその第一歩と言えます。出版されたのは総論の4巻ですが、当初の構想は、総論4巻各論8巻の12巻です。昭和4年に全12巻の『日本現代教育学大系』が出版されましたが、教育学の大家35人の共著でした。これを一人でやろうという牧口先生も牧口先生ですが、この大事業を一步も引くことなく引き受けられたのが戸田先生です。

1939（昭和14）年5月、牧口先生は、金子貞子さんが出席している懇談会の席上で、「創価教育の学校を作りたい、小学校から大学まで、奨学金制度も充実した学校を作りたい。私ができなければ戸田君がやってくれるだろう」という話をされました。聞いた人からすれば、夢物語のような話です。

しかし、ここでひとつ疑問が湧いてきます。『創価教育学体系』では触れられていない創価教育の学校の話、牧口先生は、なぜこの時期に語られたのかということです。考えられることは、創価教育学会も体制が整い、少しずつ会員が増え始めてきた時期であること、そして、体系第1巻出版から10年を前にして、ということです。

牧口先生は、次への大きな目標を示されたのではないかと思います。牧口先生の最終目標は、一貫教育の学校創設で完結するというものではありません。牧口先生は、むしろ、もっと大きな目標への一里塚としておっしゃったのではないかと思います。

今までお話しした通り、牧口先生は、庶民の大地に根ざして生きてこられました。そして、その庶民が、平和で幸福であることを深く願い、教育者として歩んでこられました。しかし、教育者としての限界も、また、強く感じてこられたと思います。教師である以上、たとえ不本意でも、国家の定めた教科書で教えずにはいけません。また、子どもたちが幸福になれない理由は、貧困や病気、戦争だけではありません。日蓮の仏法を深く学ぶに従い、人々の生命の中にある宿命の転換、さらには、国家の宿命転換が必要であることに思いが及びました。また、地理学者である牧口先生にとって庶民とは、日本人だけではありません。青年時代教えた中国の人々、アメリカに渡った人々、更には、『人生地理学』で牧口先生が述べたように、世界の人々とは生活を通して幾重にもつながっているのです。

このように考えを進めていくと、牧口先生は、単に、そこに学んだ学生・生徒が、「創価教育のベネフィット」を享受するための学校ではなく、そこで学んだ学生たちが「人道的競争」の連鎖を広げていく、「人類の平和を守るフォートレス」、そんな学校を夢見ていたのではないかと思います。

更には、その運動を継続し、時代精神にまで高めていくためには、大文化建設の揺籃となる最高学府の存在がどうしても必要であると考えたのではないかと思います。

戸田先生は決然と立ち上がりました。それまでの戸田先生の出版社は、戸田先生の学習参考書

と教育雑誌『新教材集録』を出版するささやかなもので、経営的にも厳しい時期⁽¹⁷⁾も経験しましたが、それも乗り越え、1940（昭和15）年1月には、学年別学習雑誌『小学生日本 五年』を創刊、4月には、『小学生日本 六年』も創刊し、この雑誌で通信教授も始めました。執筆者との交流も始まりました。

同年には、戸田先生の同郷の作家・子母沢寛の作品の出版から始めた大道書房を設立、小説家たちとの交流も始まりました。また、衛星のように戸田先生の周りにはいくつかの出版社が集まり、出版を中心とした企業集団が誕生しました。何のために、戸田先生は企業家に徹したのでしょうか。創価教育学会の発展を支援するとともに、師匠の構想実現を深く心に誓ってのことだったと思います。

深く秘めた戸田先生の心は、戦後の事業の再建からも見ることができます。1945（昭和20）年、出獄した翌8月には、通信教授の授業を開始、これは、全国55の新聞に広告を出すという大規模なものでした。広島、長崎の新聞にも10月以降広告が出ています。1946（昭和21）年には、質の悪いざら紙の粗末なものですが、十数冊の学習参考書を出版しています。これは日本には一冊も残っていません。占領軍の検閲を受けた本が、ワシントン郊外のメリーランド大学の図書館⁽¹⁸⁾に残っておりました。さらに、1948（昭和23）年1月には、月刊少年雑誌『冒険少年』を創刊します。

戸田先生の心には、常に牧口先生の学校設立の夢があったのではないかと思います。しかし、度重なる事業の挫折と自らが果たすと誓った不幸な民衆を救うという大きな使命を考えた時、今まで心に深く秘めてこられた創価大学・学園の構想の一切を池田先生に託すと決められました。これが、1950（昭和25）年11月16日の日大食堂でのお二人の語りではなかったかと思えます。この日、創価教育のバトンは池田先生にしっかりと託されました。『創価教育学体系・第1巻』出版から20年を2日後に控えた日でした。

事業の挫折、創価学会理事長辞任という秋霜・烈日の日々、戸田先生は池田先生に対して寸暇を惜しんで万般の学問を教えます。「戸田大学」と呼ばれるものです。また、青年達に対しても水滸会等で小説を教材として訓練を行います。今までお話した創価教育の流れで見ると、池田先生に対して戸田先生が行ってこられた教育は、創価教育では、どのような教育を継承していけばよいのか、深く示唆するものがあるように思えてなりません。

振り返ってみると、牧口先生が戸田先生に語られ、お二人が共有されてきた夢は、三つあったと思います。その第一は、『創価教育学体系』の出版です。第二は、創価大学、創価学園の創立です。そして、第三は、世界中の人々が安心して暮らせる時代を築くことではないかと思います。

今年の11月18日には、戸田先生が、牧口先生の第一の夢を実現されてから、80周年を迎えます。第二の、創価大学・創価学園の創立の夢は、池田先生の手で、関西学園、札幌幼稚園、更にはア

⁽¹⁷⁾ 拙稿『『新教』第6巻第1号掲載の牧口常三郎の論考5編』『創価教育』第4号（創価教育研究所 2011年）、278頁の図表『『帝国信用録』にみる戸田甚一の子会社の経営状況』参照。

⁽¹⁸⁾ ゴードン・W・プランゲ文庫に所蔵されている。

メロカ創価大学と相次いで実現してこられました。第三の、牧口先生の悲願ともいうべき夢は、池田先生が、点と点を結び世界に広げてくださった信頼のネットワークを、更に広げていくことによって、私たちの手で実現していかななくてはなりません。その為の、先駆けを担うのが創価学園、創価大学に集った学園生、創大生であると思います。

共々に、創立者池田先生に対する満腔の感謝の思いを心に抱きつつ、混迷の時代を切り開く「創価教育の世紀」を築いてまいりたいと思います。ご静聴大変にありがとうございました。